



アジア国際切手展 メルボルン2017 見学記

大沼幸雄

1. はじめに

3月30日から4日間の会期で開かれたメルボルン2017を見学して参りました。その後、3日間を費やして第二次世界大戦の日米の激戦地ソロモン諸島のガダルカナル島も訪れて来ました。

2. 会場は豪州の名門競馬場

今回の切手展は、FIAP主催の国際展です。会場は、市の中心から8キロほど南東に位置するコルフフィールド競馬場です。メルボルン市の中央駅サザンクロス・ステーション(写真1)から郊外電車に乗ると30分程度で、目的のコルフフィールド駅に到着します。会場はグラント・スタンドのガラス張りの観覧席(写真2・3・4)で、1階がディーラー・ブース、2階が展示場です。

「切手とコイン・ショウ」の、ディーラー・ブースではコインも販売していました。(写真5)

展示フレーム総数は、1100フレーム。そのうち150フレームは、ヴィクトリア王立郵趣協会(Royal Philatelic Society of Victoria)の創立125周年記念の競争外展示用なので、950フレームがFIAPに割り当てられていました。これは、ニューヨークの世界展の約4分の一の規模です。(写真6)



写真1 サザンクロス中央駅の近辺の斬新なデザインの建築物



写真2 会場となった競馬場の総ガラス張り観覧席



写真3 会場となった競馬場にて



写真4 コルフフィールド競馬場入口にて

3. 目玉はヴィクトリア女王直筆の書状

小生は、いつものベートーヴェンの作品を、基本的な構成は変えずに、10リーフほど手直ししてチャンピオン・クラスに出展しました。目玉としては、ヴィクトリア女王直筆のお悔やみ状カバー(図7)で、ニューヨークの世界展のオークションで入手したものです。

チャンピオン・クラスの出品は、小規模でわずか4作品しか出ておらず、小生以外は、伝統1作品、ステーションナリー2作品のみでした。蓋を開いたら、予想通りグランプリ・ドヌールは、伝統部門のシャム1899-1910に行きました。私のチャンピオン・クラスへの参加は、ニューヨーク世界展に続いて2回目となります。大金賞を3回頂くと、あとはチャンピオン・クラスに出展してグランプリ・ドヌールを狙う以外ありません。テーマティクでは、まだこの頂点を極めた出品者は皆無です。歴史的には、伝統部門が圧倒的に強く、その後、後発の郵便史からもグランプリが出るようになったようです。テーマティクも、何時の日か日の目を見る時が訪れるのを期待したいと思います。FIAP展のチャンピオン・クラスでテーマティクが出展されたのは、私の知る限りでは史上初めてでしょうから、「テーマティクでもチャンピオン・クラスにできる作品があるのだ」と言うことがアピールできただけでも意義があったと思います。



写真5 ディーラー・ブースの光景



図7 目玉として投入したヴィクトリア女王直筆のお悔やみ状カバー。(ペンスブルー4版貼り)

4. 意外と少なかったテーマティク作品

テーマティク部門全体の作品数も、わずか9作品でした。内訳は、中国7作品、インド1作品、日本1作品(内藤陽介さんの「日本と15年戦争」)です。テーマティクに強い韓国が出ていなかったのも、韓国コミッショナーに尋ねたところ「申請はしたが、許可されなくて残念」とのことでした。賞は、金賞1作品(日本-内藤さん90点)、大金銀賞2作品(中国「写真」86点、中国「タバコ」85点)、金銀賞2作品(中国「におい」83点、



写真6 所せましと立ち並ぶフレーム枠

中国「SEA DOG」81点)、大銀賞3作品(中国「マガジン」78点、中国「目」77点、インド「雉類」77点)、銀賞1作品(中国「埠頭」)です。中国の作品も、ひところのトピカル的な作品から脱皮して正統派のテーマティク作品が多く出されていました。テーマティク部門で中国が台頭してくる予兆のようなものを感じました。ワンフレーム部門では、川辺勝さんの「ドラクロワ“民衆を率いる自由の女神”」が、83点を獲得しました。この部門では、メダル別の評価はなく点数のみとなりますが、テーマティク部門のメダルですと「金銀賞」相当となります。

5. 永井正保さんが ナショナル・グランプリ獲得

日本の出展の特記事項は、永井正保さんの「民間印刷時代の英領ヴィクトリア切手1850-1859」(大金賞96点)が、グランプリ・ナショナルを獲得したとことです。前回のオーストラリア世界展で93点でしたが、今回、見事にブレイクスルーを達成しました。

その他の特記事項は、オープン部門、現代郵趣部門の出展があり、前者ではオーストラリアのDiffen Gary氏が96点の大金賞(ガリポリでの豪州軍参戦)を得たこと、現代郵趣では、伊藤文久氏の「ウクライナ・インフレ」が部門最高点の87点の大金銀賞で、特別賞も得たことなどが挙げられます。

文献を除く競争作品数を見ると、総計230作品中オーストラリアの作品が83作品と比率では36%を占めており、ニュージーランドの15作品を含めると比率が43%まで上がるので大洋州色の濃い切手展であったと言えます。続いて日本、中国がそれぞれ19作品と8%ずつのシェアでした。大金賞・金賞の取得率では、シンガポール、タイ、マレーシア、香港、台湾は、高い比率を誇っており、総じて選りすぐった作品が出されていたと思われます。



写真8 ジビエ料理を楽しむ会

6. ワニ肉がおいしい! ジビエ料理の夜

第二日目の夜は、内藤さんのペンションに収友がつまり、内藤さんと山田廉一さんの手になる、ジビエ料理を食べるパーティがありました(写真8・9)。ワニ、エミウ、カンガルー、フラビーなど滅多に食べられないものが並びオーストラリア産のビール、ワインなどで大いに盛り上がりました。ワニは初体験でしたが、鶏肉のようにバサバサした食感で意外と美味しい印象です。

7. パルマレスは水族館で!

第三日目は、メルボルン水族館でパルマレスが開かれました。円筒形の水槽に珍しい魚が泳ぎ、まるで竜宮城にいる雰囲気です。円卓テーブルに8人くらいで着席しての賑やかな宴会でした。メダルのレベルごとに、それぞれ賞に呼び出しがあり、私も登壇して大金賞のメダルを頂戴しました。(写真10・11)



写真10 パルマレス宴席にて(左より伊藤純英さん、吉田敬さんと筆者)



写真9 巨大ロブスターも
ジビエ料理の素材に

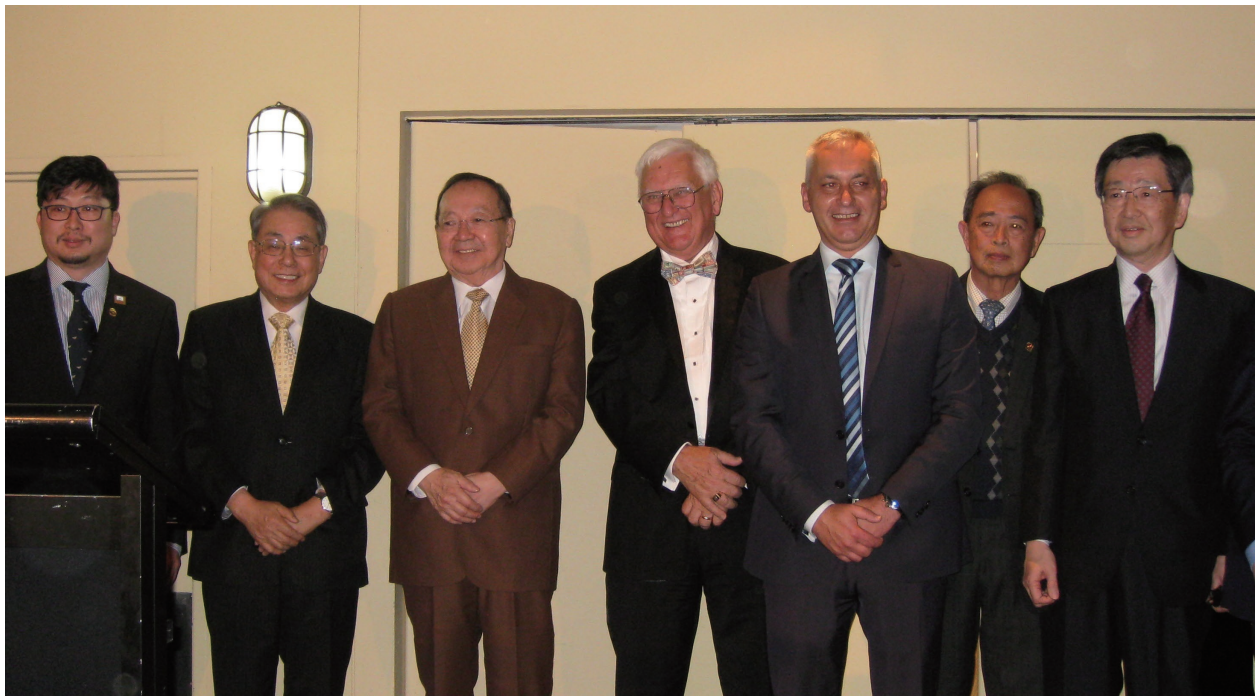


写真11 パルマレスにて。右端はグランプリの永井さん、左より2人目が筆者

8. マルチ・エスニック国家を目指すオーストラリア

最終日は、ジューリー・アプレイザルがありました。チャンピオン・クラスは対象外なので、ヤラ川の畔にある移民博物館(写真12・13)を訪れました。19世紀後半に完成した税関・兼入国審査の建物で、ずっしりとした重厚な建築物です。白豪主義から180度転換し今や超マルチ・エスニック国家を目指していることが良くわか



写真12・13 豪壮な移民博物館とその内部。1876年完成の旧税関建物。今も英国植民地時代の栄華栄耀を伝えている。

りました。200ヶ国、260の言語、135の信仰対象の人々が住む国と紹介されており、繁華街を歩いていてもそれが実感できました。日本からの本格的な移民は、戦後日本へ進駐したオーストラリア兵への戦争花嫁約500名であったことは非常に興味を引きました。

9. 第二次世界大戦の激戦地 ガダルカナルへ

メルボルンの最後の3日間は、ガダルカナル島への旅でした。内藤さんが行くというので我々夫婦も便乗して出かけました。ここは太平洋にある島嶼国で、国名はソロモン諸島、首府のホニアラはガダルカナル島にあります。ソロモン諸島は、一人当たりGDP2000ドル程度で、最貧国の一つです。

メルボルン発朝6時のカンタス航空で、ブリスベンで乗継ぎ、午後2時過ぎにホニアラ空港に到着しました。この滑走路は、日本軍が最初に建設した戦略拠点で、その争奪をめぐって日米大激戦となっただけに、いささかの感慨を覚えました。

次の日は、いよいよ「戦跡ツアー」です。マラリア蚊が怖いので、白いシャツ、ズボンに蚊よけのスプレーをたっぷり吹き付けてトヨタに乗り込みました。案内人兼運転手は、ホテル勤務の現地人のフランシス・デヴェさんで、彼は、年齢50歳くらいの屈強な体格の持ち主です。全国ソロモン会の現地代表をしており、遺骨収集団のお世話もしているとのことで、この手のツアーにはうってつけの人物でした。



写真14 座礁した日本船の残骸。今は、スキューバダイバーの楽園。



写真15 野外の戦争博物館にて。零戦の残骸と言うが？



10. 日本兵の犠牲者2万人の 半数の遺骨未回収

一旦、町の中心を出ると、舗装の無いでこぼこ道です。住民は、高床式の粗末な家に住むたたまいを見ると、まさに「赤貧洗うがごとし」を地で行く感じです。ジャングルを縫って多数の小さな川が北へ流れ込んでおり、それぞれ日本名がついていたそうです。日本軍が目印に覚えやすい名前を付けたのでしょう。紺碧の海に突き出した艦艇の舳(写真14)、密林の中に兵器の残骸を並べた戦争博物館(写真15)、民間の建立した多数の慰霊碑(写真16)など回りました。フランスさんによると、この地では、約20,000人の日本兵が犠牲になり、うち15,000人は餓死で死亡、いまだ半数の遺骨が未回収だそうです。

11. 郵趣の未来は？

最後に中央郵便局(写真17)に行きました。質素な建物に入ると、ショウ・ウィンドウにソロモン諸島の切手が多数陳列されていました。我々が郵趣家であるということとフランスさんは「実は、自分も集めている」とのことと話が合いました。「この子供たちは切手を集めていますか？」と聞いたところ「まったく興味がない」とのこと。先進国の郵趣の衰退傾向はやむを得ませんが、途上国も同じだと将来は厳しい印象です。

海外の切手展に出展した時には、フィラホリディと名付けて、近隣の名所旧跡を見てまわるのを常としていますが、今回は、滅多に見られないメラネシアの世界を垣間見ることができました。

(2017年6月・記)



写真17 ガダルカナル島の中央郵便局

写真16 ほぼ全滅の一木支隊の慰霊碑を水で清める筆者